

平和への願いを込めて

『平和都市宣言推進事業「平和の旅」』

8月6日(月)、野々市・布水中学校から13人の生徒が広島市の平和記念式典に参加し、平和への祈りを捧げました。式典前日の5日(日)には、原爆の子の像の前で野々市中学校の志波絃音さんが自身の思いをつづった平和宣言文を読み上げ、平和への誓いを新たにするとともに、市内小中学校や市民から寄せられた折り鶴を捧げました。参加した生徒2人の感想文を紹介します。



「未来にも平和を」
野々市中学校3年 白馬 優樹

僕は昔から、戦争の話題が大の苦手だった。写真や絵、文章でも、すぐに気分が悪くなってしまう。「戦争を、二度としてはならない」という事は分かっていたが、「実際に、どういう事が起こったのか」は、あまり知らなかった。だからこそ、原爆のことを知るため、今回の平和の旅にのぞんだ。

まず、広島に到着して思った事は、とても街がきれいで、活気があるなという事だ。また、こんなに美しい街が、本当に、かつて原爆が落とされた広島なのか、とも思った。しかし、原爆ドームを見ると、広島は長い間悲劇を忘れることなく乗り越えてきたのだと感じた。

原爆資料館や平和記念公園を見学したり、お話を聴いたりした。遺品

の三輪車や制服を見ると、過去の、普通の生活が目に見えてくるようになった。しかし、それらが一瞬で無くなった事実は、あまりにも残酷で、胸が痛んだ。そして、今、当たり前のように生活しているのが、どれだけ幸せな事か、改めて実感した。

はじめに書いたように、僕は戦争の話題が大の苦手だ。それでも、今後の平和のことを考えるためには、考えなくてはいけない、学ばなくてはいけないと思った。二度とあの惨状を繰り返さないよう、被爆地を訪れ、核兵器の恐ろしさを知り、どうすれば戦争が無くなるのか考える必要があるだろう。

唯一の被爆国である日本。平和への扉を開ける、重要な鍵とならなければならぬ。世界から、核兵器はもろろん、すべての戦争や兵器が無くなるために。

「平和への近道」
布水中学校3年 宮田 友結

剥がれた皮膚。道に転がる死体。黒い雨。平和な今を生きる私には、どんなに考えてもこんな地獄のような光景が、想像できませんでしたが、でも、平和の旅を終えた今なら、その悲惨さを少し理解できるようになった気がします。

私は、今回の旅で核兵器の恐ろしさを実感することができました。たった一瞬で多くの人の命を奪い、未だに被爆者の心身をむしばんでいます。「そんな悲劇を二度と繰り返してはならない」という強い思いが、今の平和につながっているんだと思います。

原爆ドームを訪れたとき、私はまるで戦争中にタイムスリップをしたかのように感じました。周りの建物は現代的になっていくなか、原爆ドームだけはただそこで原爆の威力、戦争の悲惨さを訴えていました。戦争や原爆に関する建物は、原爆



ドームや平和記念資料館だけではありませんでした。折り鶴タワーなどの近代的な建物も、主に若い人に向けて、平和の大切さを呼びかけるものです。こうした様々な工夫をこらし後世にも、8月6日の悲劇を伝えていくのです。

平和の旅を終えて、私は「世界がより平和になる方法」を考えました。世界にはまだ紛争や内紛が多く存在しています。それを無くすためには、一人一人が平和を考え、思うことが大事だと思います。だから、私は今回の旅で学んだ事を家族や友人など、より多くの人に伝えていきます。それが、平和への第一歩となることを私は知ったのです。

